



# 発達障がい学生の 大学準備の重要性

大阪大学 キャンパスライフ健康支援センター  
諏訪絵里子



# 本日の流れ

1. 発達障がい学生の現状
2. 大学における発達障がい学生の困難（高校と大学の違いを中心に）
3. 大阪大学での支援の実際
4. 大学生活に必要なものとは？

阪大大学生活準備プログラムにつづく・・・

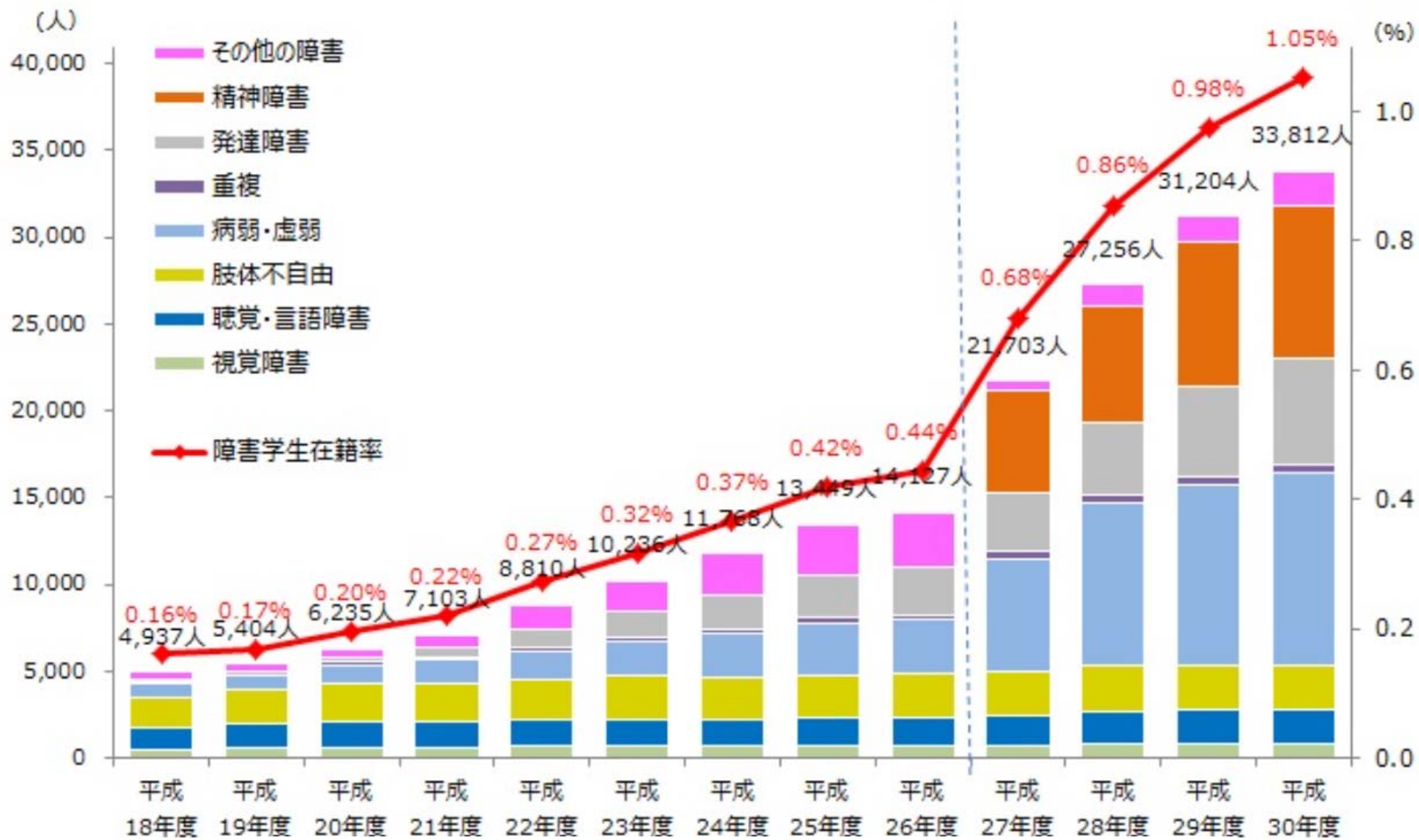




## 発達障がい学生の現状

- 発達障がい学生数は増加し続けている。
- 発達障がい学生の卒業率は65%程度。(日本の大学生の卒業率が90%前後を推移)
- ドロップアウトや留年を繰り返す学生も多い。
- 卒業生の中で、就職・進学する割合は60%程度
- 入学時ではなく、困窮してから相談に来るケースが多い。  
➡ケースの困難化



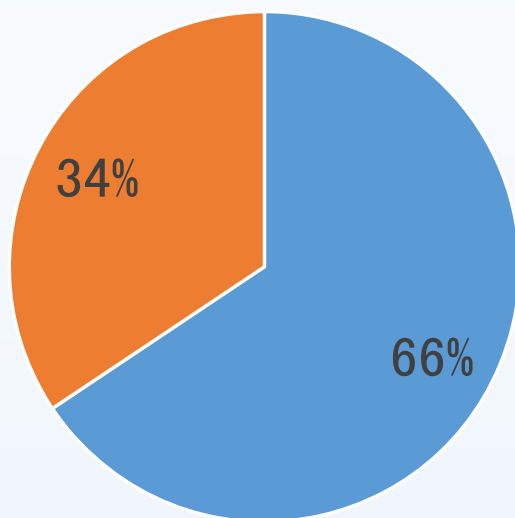


障害学生数と障害学生在籍率の推移（日本学生支援機構ウェブサイトより抜粋）

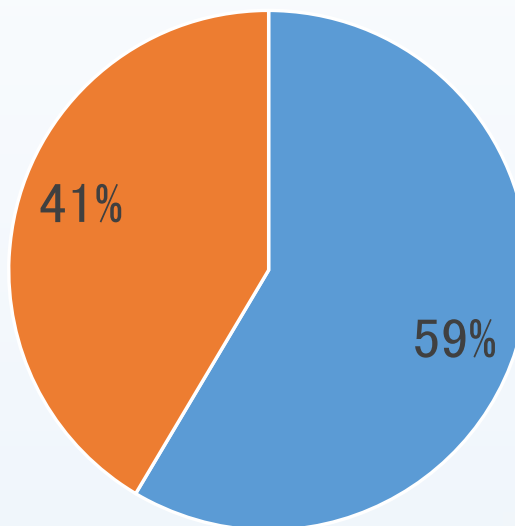


# 最高学年卒業率(障がい別)

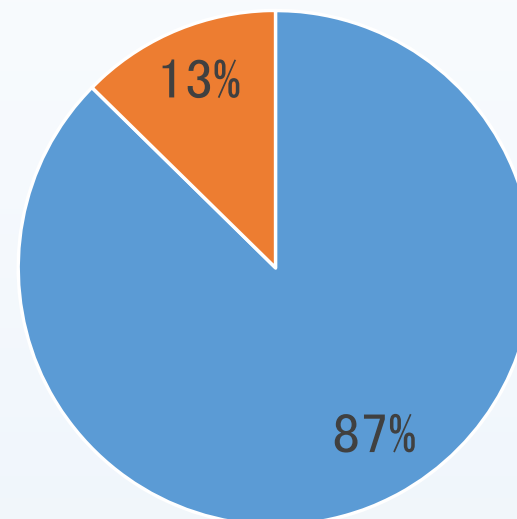
発達障害



精神障害



身体障害



■ 卒業 ■ 未卒

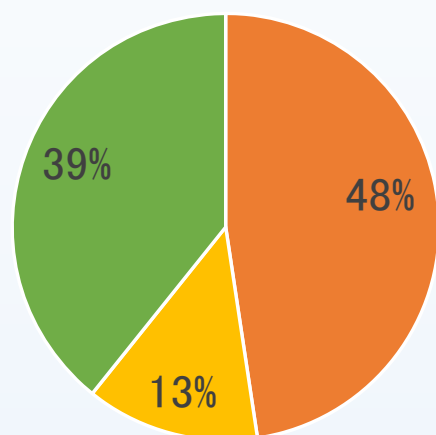
(日本学生支援機構「平成30年度障害のある学生の修学支援に関する実態調査報告書」より)



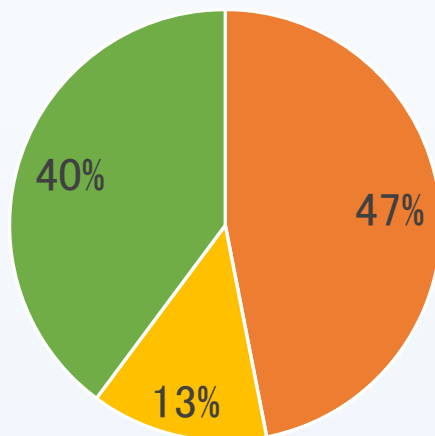


# 卒業生の進路(障がい別)

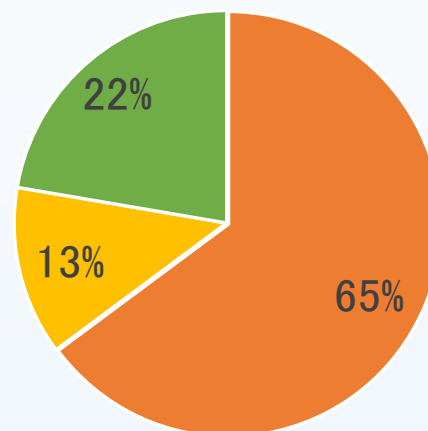
発達障害



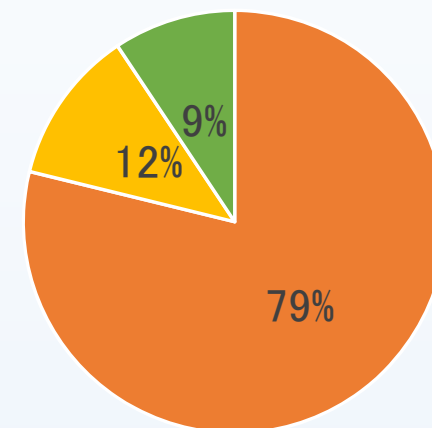
精神障害



身体障害



大学生全体



■ 就職 ■ 進学等 ■ その他

(日本学生支援機構「平成30年度障害のある学生の修学支援に関する実態調査報告書」より)





# 大学における発達障がい学生の困難

- 大学で必要なスキルと高校までで獲得する学習スキルの違い。  
➡ 高大接続の取り組み
- 大学での学習課題は社会性、コミュニケーションスキル、実行機能の困難によって阻害される (Alverson et al. 2015)。
- 大学での躓きは知的能力や適性の欠如ではなく、新しい方法、新しい環境への適応の問題から生じる (Kidwell, 2005)
- 大学で成功する発達障害学生は、他の学生より高い知的能力を有する傾向にある (Mitchell & Beresford, 2014)。

➡ 勉強ができればいい、知的能力が高ければいいとは言えない。







# 大学における発達障がい学生の困難

## 高校までと大学の違い

- 適用法や制度、教育観の違い
- 学習方法の違い
- 主体/責任の所在
- 構造化のなさ＝自由度の高さ  
時間、物理的環境、学習方法すべてが  
構造化されていない。







## ● 適用法や制度、教育観の違い

### 高等学校まで

- 個人の能力を伸ばす
- 教育を施す場
- 高校卒業程度の学力の有無を認定
- 特別支援（教育法）
- 個々に適切な教育の実施
- 診断の有無にかかわらず

### 大学

- 専門的学芸を身に着ける場
- 学びの機会を与える場
- その大学で十分学び、研究したことを認定
- 合理的配慮（人権法）
- 教育の平等な機会
- 障がいの根拠が必要





## ● 学習方法の違い 義務教育～高校まで

- 授業30時間／週
- 30～40人クラス
- 教科書中心の学び
- 知識の正しい理解と活用
- やや一方向的
- 試験や宿題で理解度を確認
- 校舎内
- 固定時間割
- 責任は教員



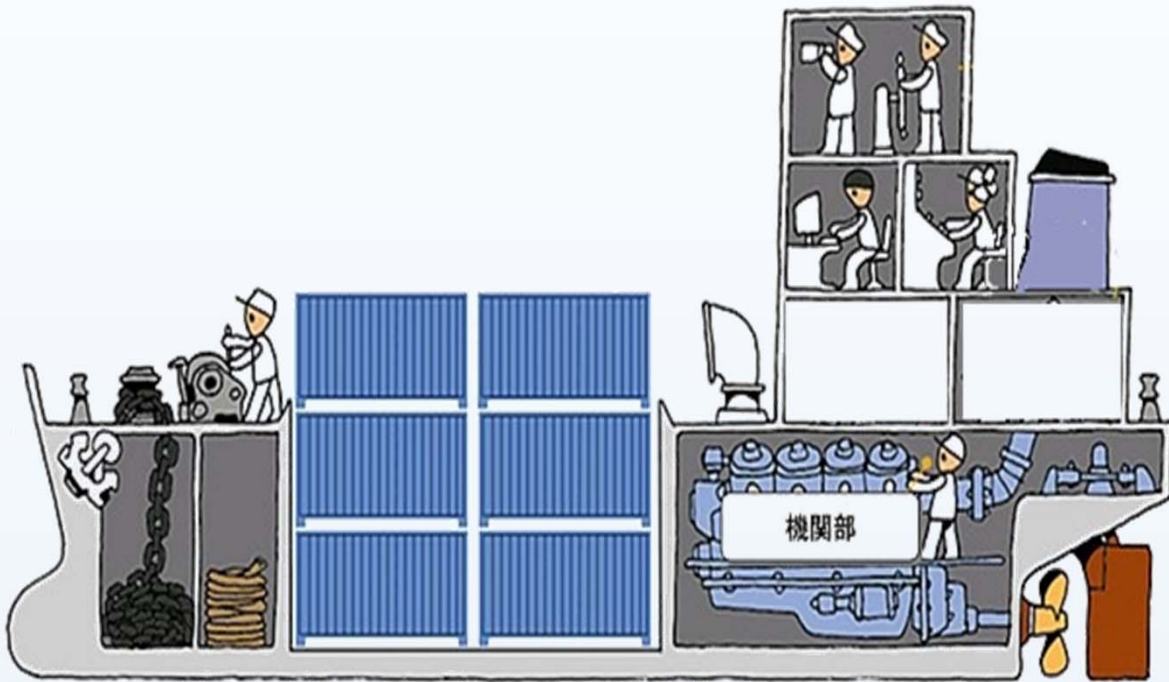
## 大学

- 平均15時間／週
- 10～200人のクラス
- 先行研究中心
- 自分で研究・考察
- より双方向的・主体的(アクティブラーニング)
- 試験・課題は成績評価の為のもの
- キャンパスワイド、専門施設
- 履修計画を立てる
- 責任は学生

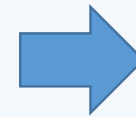




● 主体/責任の所在



運転手は本人





# 大学における発達障がい学生の困難

- 構造化されていない環境での学習・生活は苦手。  
（自分で計画を立てる。誘惑が多い。要点を自分で判断。）
- 新たな学習習慣・学習方法を身に着けるのが困難。
- 大学のルールややり方を誰も教えてくれない。
- 支援の必要性がわからない。
- 躓いても気づいてもらえない。
- 支援や情報、機会に自分からアクセスできない。  
➡ 学びの機会を失いがち。





# 大学における発達障がい学生の困難

## 大学でよくある例

授業が理解できない。

- ◆高校までは授業を聞かなくても、参考書等で理解できた。
- ◆表面上の理解では納得いかなかったなので、自分で勉強した。

出席、課題提出、連絡などルールを守らない。

- ◆苦手なものは勉強しなくても、得意科目でカバーできた。
- ◆課題が出せなくても試験の点数が高いので大丈夫だった。
- ◆苦手なものは大目に見られた。
- ◆高校や周囲の方から連絡してくれた。





# 大学における発達障がい学生の困難

困った時にすぐ相談しない。

- ◆これまで何とかしてきたから何とかなる。
- ◆自分がどこで躓いているのかわからない。

Ex：履修計画が立てられない

説明がよくわからない

- ・ 劣等感
- ・ 聞けない
- ・ 対処法がわからない

結果のイメージができない

- ・ 進級できない？
- ・ 大事？

ちゃんとやらない

- ・ 先延ばし
- ・ 逃避
- ・ 無理解







# 大学での支援の実際

## ●修学上の合理的な配慮

≠できる限りの最上の配慮

- ◆障がい特性に対して根拠があり、妥当な内容であること
- ◆大学教育の水準、本質、ルールを変えないこと。
- ◆公平性が損なわれないこと。

それ以外の支援は大学による。法的義務ではない。



…終末論と黙示録がドイツ語圏文学に影響を与えました。一つはキリスト教的黙示文学の原テキストである『ヨハネの黙示録』の上に築かれた、キリスト教的・聖書的な地平から考えることができ…

結局何の話？よくわからないから、ノートがまとめられないよ

え？今、先生何て言った？ノートとってたら聞き逃した

協応の悪さ

聴覚刺激・継次処理の弱さ

終末論と黙示録かあ…黙示…目次録ってあるよな…あ、ノートとってない

注意の転導性・選択性(こだわり)

診断名: ADHD



# 大阪大学における支援の実際



忘れてる

こだわり

見通しの甘さ

学習内容  
理解の不足



不注意

記憶

イマジネーション

言語能力の偏り

イマジネーション

抑制

聴覚処理

注意集中





# 大学生生活に必要なものとは？

## 大学の義務

- 大学の責任の範囲を明確にする（ディプロマポリシーやアカデミックスタンダードを見直し、明確にする）。
- 大学としての方針やシステムの設定は急務
- 方針を事前に学生に周知する
- 支援と教育的配慮、合理的配慮が必要。但し、義務は配慮のみ

学生の機能を高めるための支援。  
学生が配慮を受けられるように支援。





# 大学生生活に必要なものとは？

## 学生の義務

- 障害に対して適切な理解がある。
- 必要に応じて治療を受けており，大学生生活の続行が治療の妨げにならない。
- 安全に学生生活を送ることができる。
- 大学生生活の維持に必要な機能は保たれている，配慮があれば保てる。 *i.e.)* 授業に一定以上参加し，内容を理解できる。ルールに従う。課題や試験に取り組むことができる。最低限のコミュニケーションがとれる。など





# 大学生生活に必要なものとは？

- 発達障がい学生の大学での成功に影響を与えている要因
  - 1. 自己理解、特性理解 (例えば Krell, 2011; Brown et al., 2012;
  - 2. 大学への意欲や開かれた態度 (Alverson et al; 2015)
  - 3. 大学理解
  - 4. ソーシャルスキル (自律した生活スキル・アドボカシースキルなどを含む)
  - 5. アカデミックスキル
- ☞ 新たな環境に適応しやすく、苦手に対処するか考え、必要な支援を受けながら努力する素地がある。
- 大学への具体的移行プランを立て、ガイダンスを受けた発達障害学生はスムーズに大学で就学できる (Roberts, 2010; Alverson et al, 2015)。







# 大学生生活に必要なものとは？

➡入学前に移行支援をして準備をする必要性

- ◆大学や合理的配慮についての理解する。
- ◆構造化されていない環境で、自分がどこまでできるか理解する。
- ◆新たな学習方法や必要な支援を知る。

「体験しないとイメージできない。やってみないとわからない。」

## ➡大阪大学 「大学生生活準備プログラム」

大学生生活の体験を通して、学習へのレディネス、支援へのレディネスを身に着ける。





ご清聴ありがとうございました。

